

「資本関係の外面化」(『資本論』第3部第24章)の草稿について : 第3部第1稿の第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

57

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

55

(終了ページ / End Page)

93

(発行年 / Year)

1989-06-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008501>

KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review)
Hosei University, Tokyo, Japan
Vol. 57, No. 2, 1989

「資本関係の外面化」(『資本論』 第3部第24章)の草稿について

——第3部第1稿の第5章から——

大谷 禎之介

1. はじめに

『資本論』第3部のエンゲルス版(現行版)第5篇第24章「利子生み資本の形態での資本関係の外面化」は、マルクスの第3部用の草稿のうちの「第1稿」すなわちいわゆる「主要原稿」の312-316ページからまとめられたものである。草稿では、この部分は第5章の6つの項目のうちの第4の項目にあたるが、ここにはその冒頭に「5) 利子生み資本の形態での剰余価値および資本関係一般の外面化」という項目番号および表題がある。

エンゲルス版のこの章の内容は、先行する第21~23章と同じく、マルクスの草稿とほぼ一致している。ここでのエンゲルスの作業の大半は、それまで彼が第3部の草稿の整理をするのにとってきたしかたで個々の文章を手入れすることと、草稿での注や追記を印刷用に整理・配置することとであった。

本稿では、第3部第1稿についてのこれまでのいくつかの拙稿と同様のしかたで¹⁾、エンゲルス版第24章にあたる草稿第5章の「5) 利子生み資本の形態での剰余価値および資本関係一般の外面化」を調べ、それとエンゲルス版との相違を示す。この草稿部分の内容そのものについての、またこの部分にかかわる諸論点についての立ち入った検討は、別の機会に譲ることとする。

ただし、本稿で取り扱う草稿部分はあまり大きなものではないので、今回にかぎって、マルクスがこの部分を執筆するときに利用した『1861—1863年草稿』との関係を、また多くの場合に、利用された記述そのものを注記することにした。これによって、この部分を執筆するときにマルクスがどのように『1861—1863年草稿』を利用したかが読み取れるはずであり、また、本草稿でのマルクスの簡潔な記述の意味を一步掘り下げて理解するための一助となるものと考えている。

マルクスが本稿部分を執筆するときに『1861—1863年草稿』によったその依存の程度はきわめて大きく、しかもそれは、第5章のこれ以前の3つの節に比べてはるかに高い。大きく利用されたのは、第1に、『1861—1863年草稿』のノート第15冊中の「収入とその諸源泉」の部分である。マルクスは、ノートで50ページを超えるこの部分の全体を見返しながら本稿部分を執筆したのであり、とくに、第2パラグラフ（本稿63—64ページ）は、「収入とその諸源泉」のなかに散在する7箇所の記述を、大きく手を加えることをしないまま1つに集めたものとなっている。第2に、本稿部分の約3分の1を占める、プライスとミュラーとについての記述は、『1861—1863年草稿』のノート第18冊に、「資本主義的生産における貨幣の還流運動」を中断して書かれた「複利」にかんするまとまった記述によっている。そのほか、この2つの部分以外に『1861—1863年草稿』から採られたものが若干あり、この草稿ではじめて書き下ろされたと思なすことができる箇所はわずかである。

なお、第21～23章部分についての拙稿では、第5章の草稿と『1861—1863年草稿』との関係を示さなかったが、この作業は、すでに紹介した草稿と『1861—1863年草稿』とを対比されればできることなので、読者におまかせすることにしたい。

- 1) 以下のものを参照されたい。「『貨幣取扱資本』（『資本論』第3部第19章）の草稿について」、『経済志林』第50巻第3・4号、1983年。「『信用と架空資本』（『資本論』第3部第25章）の草稿について(中)」、『経済志林』第51巻第3号、

1983年。「資本主義的生産における信用の役割」(『資本論』第3部第27章)の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号, 1985年。「利子生み資本」(『資本論』第3部第21章)の草稿について、『経済志林』第56巻第3号, 1988年。「利潤の分割」(『資本論』第3部第22章)の草稿について、『経済志林』第56巻第4号, 1989年。「利子と企業者利得」(『資本論』第3部第23章)の草稿について、『経済志林』第57巻第1号, 1989年。

2. 第24章の草稿, それとエンゲルス版との相違

本節では、第3部第24章に用いられたマルクスの草稿を見る。これまでと同様に、草稿からの訳文をかかげ、それに、エンゲルス版(MEW版, また必要に応じて、エンゲルス自身の手にかかる唯一の版である1894年のマイスナー版——「1894年版」と略称する——)における手入れを注記する。注記する手入れ(相違)の範囲や用いる記号類は、これまでのものと同じである。なお訳文には、岡崎次郎氏の訳(大月書店刊の諸版)を土台として使わせていただいたが、ほとんどそのままとなっているところもあれば、大きく手を加えたところもある。いずれにせよ、エンゲルス版との相違を示す必要によって訳文が大きく制約されていることをご理解いただきたい。

草稿そのものの取り扱いおよびそれへの注記にかんする約束事は、次のとおりである。

注記のさいに、エンゲルス版とは異なる、草稿でのマルクスの原文をなるべく示すことを原則とする。エンゲルスの手入れは、訳文でも変更が生じるものばかりでなく、同じ意味の別の単語で置き換えた場合、文章構造の変更、括弧類の変更、なども注記する。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるので、原則として取らないことにする。——正書法上の変更、語順の局部的な変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の削除・挿入、前置詞などの文体上の反復挿入、同じ動作名詞の-ung形と-en形との交換、意味にほとんど変更をもたらさない句読点の変更、語句の局部的変更、注番号の変更、等々。

行の上などに書き込まれていることによって、あとから（といっても直後かもしれないのであるが）書き込まれたことがわかる語句は《 》で示す。

{ } はマルクスによる角括弧, [] は筆者の挿入である。下線による強調は、とくに注記しないかぎり、すべてマルクスの草稿における、1本の下線による強調である。エンゲルス版では、この強調は原則として省かれた。エンゲルス版で強調されている部分（1894年版では隔字体、MEW版ではイタリック体）は、そのつど注記する。

マルクス自身の注は、筆者の注と区別できるようにするため、その注番号をゴシック体にし、またそのままに「[原注]」と記す。

草稿ページは次の記号で示す。ここでの数字および語句はもちろん例示のためのものである。

|326上| Es... ここから 326 ページ上半部が始まる。

/326上/Es... ここから 326 ページ上半部の中途のある部分が始まる。

...so | ここまでのページ上半部または下半部が終わる。

...so / ページ上半部または下半部の途中でいったん切れることを示す。つまり、このページ上半部または下半部にはさらに別のなんらかの記述があることを示す。

ここで取り扱う部分では、マルクスは各ページの上半部に本文を、下半部にそれへの注を書いている。「326上」は 326 ページ上半部を、「326下」は同じく下半部を示す。

ページの変わり目が文の中途である場合には、あとのページの最初の語の直前をその変わり目とみなす。

注のなかでは、草稿とエンゲルス版との相違は、草稿訳文の該当部分をまず掲げ、次にそれがエンゲルス版でどのようになっているかを記す、というしかたで示す。すなわち、「A→B」は、草稿中のAがエンゲルス版ではBに変えられていることを示し、「A—削除」は、草稿中のAがエンゲルス版では削除されていることを、「挿入—A」は、エンゲルス版ではここにAが挿入されていることを示す。意味の変化をもたらさない語

句の変更(外国語のドイツ語への変更, 文体上の統一や改善——とエンゲルスには思われたもの——のための変更, 等々)については, 誤解が生じないかぎり, 訳文中の訳語の直後に原語を〔 〕に入れて示した(このような場合でなくても, 原語を示したほうがいと判断した場合には, それを〔 〕に入れて示している)。頻出し, かつほとんど例外なく同じ原則で行なわれている変更の場合には, 最初にその旨を注記し, その後のいちいちの記載を省いた(たとえば, functioniren→fungieren, Zinstragendes Capital→zinstragendes Kapital)。場合によっては, 注のなかで, 訳語を掲げたあとに, 原語で「A→B」とする仕方で示した。これらの変更の記載は, 煩瑣をさけるために, 網羅的ではなく適宜取捨選択してある。

なお, 「貨幣資本」ないし「貨幣資本家」の原語が monied capital ないし monied capitalist である場合には, 必ずそれを〔 〕に入れて示しているので, この語がない場合には, 原語は Geldcapital ないし Geldcapitalist となっているわけである。

[312上] 5)¹⁾ 利子生み資本の形態での剰余価値および²⁾ 資本関係一般³⁾ の外面化⁴⁾

- 1) 「5)」→「第24章」 この「5)」は「4)」とあるべきところと思われる。この点については、拙稿「利子と企業者利得」(『資本論』第3部第23章)の草稿について、『経済志林』、第57巻第1号、1989年、64ページの注1)を参照されたい。
- 2) 「剰余価値および」——削除。
- 3) 「一般 [überhaupt]」——削除。
- 4) 以上の表題の原文は次のとおり。5) Veräusserlichung d. Mehrwerts u. d. Capitalverhältnisses überhaupt in d. Form d. Zinstragenden Capitals.

利子生み資本において、資本関係はその最も外面的で最も物神的な形態に到達する。¹⁾ ここでは、われわれは、 $G _ G^{2)}$ 、より多くの貨幣を生む³⁾ 貨幣、自己自身を増殖する価値を、これらの極⁴⁾ を媒介する過程なしにもつのである。商人資本、 $G _ W _ G^{5)}$ では、少なくとも資本主義的運動の一般的な形態がある⁶⁾。といっても、この形態は純粋に⁷⁾ 流通部面にとどまっており、したがって利潤も収奪利潤⁸⁾ として現われるのではあるが。⁹⁾ いずれにせよ、¹⁰⁾ この形態は¹¹⁾ 1つの過程を、反対の段階の統一を、だからまた、¹²⁾ 商品の買いと売りという2つの反対の段階¹³⁾に分かれる運動を、表わしている。このことは、 $G _ G'$ 、すなわち利子生み資本の形態では消えてしまっている。たとえば、1000ポンドが貨幣資本家 [monied Capitalist]¹⁴⁾によって貸し出され、利率が5%だとすれば、1000ポンドという価値は、¹⁵⁾ 資本としては1050ポンド (=C+C/i、ここでCは資本であり、iは利率である)¹⁶⁾である。1000ポンドの価値は、資本としては¹⁷⁾ 1050ポンドである。すなわち、資本はけっして単純な量ではないのである。それは、量関係¹⁸⁾であり、剰余価値としての¹⁹⁾ 自分自身にたいする元本、与えられた価値という関係である。²⁰⁾ そして、すでに見たように、すべての生産資本家²¹⁾にとっては、彼らが自分の資本で機能しようと借りた資本で機能しようと、資本そのものが、このような直接に自分を増殖する価値

として、現われる²²⁾のである。

1) この1文については『1861—1863年草稿』の次の諸記述を参照されたい。

【資本の純粋な物神形態】 「利子生み資本において——利子と利潤〔すなわち企業利得〕とへの利潤の分裂において——、資本はその最も物的な形態を、純粋な物神形態を受け取ったのであり、剰余価値の本性がまったく失われてしまったことが示されているのである。ここでは資本が——物としての資本が——、剰余価値の自立的な源泉として現われる……。」(MEGA, II/3.4, S. 1497)

【物神崇拜の完成】 「剰余価値のこの2つの形態〔利子と産業利潤 (企業利得)]においては、資本の本性が、つまり資本の本質および資本主義的生産の性格が、完全に消し去られているだけではなく、反対物に転倒されている。しかし、諸物象の主体化、諸主体の物象化、原因と結果との転倒、宗教的な取り違え〔quid pro quo〕、資本の純粋な形態 G—G'が無意味に、いっさいの媒介なしに、表示され表現されるかぎりでは、資本の性格および姿態もまた完成されている。同様に、諸関係の骨化も、この諸関係を特定の社会的性格をもつ諸物象にたいする人間たちの関係として表示することも、商品の単純な神秘化と貨幣のすでにより複雑化された神秘化におけるのとはまったく違った仕方で作り上げられている。化体は、物神崇拜は、完成されている。」(MEGA, II/3.4, S. 1494)

【資本関係の外表面化】 「非合理的なものは、地代の形態においては、それが資本そのものの関係を表現しているようには表明されていない、または姿態形成〔gestalten〕されていない。……利子生み資本についてはそうではない。ここで問題なのは、資本に疎遠な関係ではなくて、資本関係そのものであり、資本主義的生産から生じる、またこの生産に独自の、資本そのものの本質を表現する関係であり、資本が資本として現われるような資本の姿態である。利潤は、過程進行中の資本にたいする連関を、剰余価値 (利潤そのもの)が生産される過程にたいする連関を依然として含んでいる。利子生み資本においては、利潤におけるのとは違って、剰余価値の姿態は疎外されて異様なものになっており、直接にその単純な姿態を、したがってまたその実体とその発生原因とを認識させなくなっている。利子では、むしろ明示的に、この疎外された形態が本質的なものとして定立されており、現存するものとして表明されている。それは、剰余価値の真の本性に対立するものとして——自立化され、固定されている。利子生み資本においては、労働にたいする資本の関係は消し去られているのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1489-1490)

【資本の絶対的な外表面化の形態】 「一方で、利潤が資本主義的生産において与えられたものとして前提されて現われるところの最終の姿態では、利潤が経

てくる多くの転化、媒介が消し去られており、認識できなくなっており、したがってまた資本の本性もそうになっているとすれば、また、この姿態に最後の一笔を加えるその同じ過程が利潤の1部分を地代として利潤に対立させ、したがって利潤を剰余価値の1つの特殊の形態——この形態は、地代が土地に連関させられるのとまったく同様に、素材的に弁別される生産用具としての資本に連関させられる——にする、ということによって、この最後の姿態がさらにいっそう固定されるとすれば、他方では、数多くの目に見えない中間項によってその内的な本質から分離されたこの姿態が、さらにいっそう外面化された形態に、あるいはむしろ、絶対的な外面化の形態に到達するのは、利子生み資本において、利潤と利子との分裂において、資本の単純な姿態としての、つまり資本がそれ自身の再生産過程に前提されている場合の姿態としての利子生み資本においてである。それにおいては、一方では資本の絶対的な形態、つまり G_G' が表現されている。〔つまり〕自己を増殖する価値〔である〕。他方では、純粋な商業資本ではまだ存在している中間項が、つまり G_W_G' 〔の〕 W が脱落した。それは、ただ、 G の自分自身にたいする関係、 G が自分自身で計られるという関係にすぎない。それは、過程の外に——過程の前提として、しかも、それがこの過程の結果であり、ただこの過程のなかでのみ、ただこの過程によってのみ資本だという、そのような過程の前提として——明示的に取り出され、分離された資本である。〕(MEGA, II/3.4, S. 1487)

- 2) G および W のあいだの「 $_$ 」は、エンゲルス版では「 $-$ 」となっている。草稿ではこの線は、各文字の並び線に、すなわち大文字の G および W の下端の部分に揃うように書かれている。いちいち注記しないが、以下すべて同様である。
- 3) 「生む」setzen→erzeugen
- 4) 「これらの極」→「両極」
- 5) 草稿では「 G_W_G' 」の中間の「 W 」の上部にラテン書体の筆記体の a のようなものが書かれている。
- 6) 「ある [sein]」→「存在している [vorhanden sein]」
- 7) 「純粋に [rein]」→「ただ……だけ [nur]」
- 8) 「収奪利潤 [Profit upon expropriation]」→「譲渡利潤 [Veräußerungsprofit]」
- 9) 挿入——「しかし、とにかく、利潤は1つの社会的な関係の所産として表わされているのであって、たんなる物の所産として表わされているのではない。」
- 10) 「いずれにせよ、」——削除。
- 11) 「この形態は」→「商人資本の形態は、依然として」
- 12) 「だからまた、」——削除。

- 13) 「段階 [Phasen]」→「過程 [Vorgänge]」
- 14) 「貨幣資本家 [monied Capitalist]」→「資本家」
- 15) 挿入——「1年間の」
- 16) 「1050ポンド (=C+C/i, ここでCは資本であり, iは利子率である)」→「C+Cz'——このCは資本であり z'は利子率つまりここでは5%=5/100=1/20である——であって, 1000+1000×1/20=1050ポンド」
- 17) 「1000ポンドの価値は, 資本としては」→「資本としての1000ポンドの価値は」
- 18) エンゲルス版では, 「関係」が強調されている。
- 19) 「剰余価値としての」→「自己を増殖する価値としての, 剰余価値を生産した元本としての」
- 20) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「1000ポンドの価値のある商品の価値は, 資本としては1050ポンドである。すなわち, 資本はけっして単純な数 [Zahl] ではない。それは単純な商品ではなくて, 展相を高められた [potenzirt] 商品である。単純な量ではなくて, 量関係である。それは, 剰余価値としての自分自身にたいする元本, 与えられた価値という関係である。」(MEGA, II/3.4, S. 1476)
- 21) 「生産資本家」→「能動的資本家」
- 22) 「現われる」——草稿では, stellt sich となっているが, エンゲルス版のように stellt sich...dar とあるべきところであり, dar の単純な書き落としであろう。

G_G' 。——ここに見られるのは, 資本の本源的な出発点である貨幣であり, また,¹⁾両極 G_G' に短縮された定式 G_W_G' ²⁾, より多くの貨幣をつくりだす貨幣である (つまり, G_G+4G)³⁾。それは, 1つの無意味な要約に収縮させられた, 資本の本源的かつ一般的な定式である (短縮された定式)⁴⁾。⁵⁾それは, 完成した資本, 生産過程と流過程との統一, したがって⁶⁾一定の期間に一定の剰余価値を生むもの⁷⁾である。利子生み資本の形態では, これが直接に, 生産過程および流過程の媒介なしに⁸⁾現われている。⁹⁾商人資本では, 利潤は交換から出てくる [だからまた, 収奪利潤 [profit upon expropriation]] ように見え, したがっていずれにせよ, 物からではなくて社会的な関係から出てくるように見える。¹⁰⁾資本および利子では,¹¹⁾資本が, 利子の, 自分自身の増加の, 神秘的かつ自己

創造的な源泉として現われている。¹²⁾物¹³⁾(貨幣, 資本, 価値)がいまでは¹⁴⁾物として¹⁵⁾資本であり, また資本はたんなる物として現われ, 生産過程および流通過程の総結果¹⁶⁾が, 物に内在する¹⁷⁾属性として現われる。そして,¹⁸⁾貨幣を貨幣として支出しようとするか, それとも資本として貸貸しようとするかは, 貨幣の所持者, すなわちいつでも交換できる形態にある商品の所持者しだいである。¹⁹⁾それゆえ, 利子生み資本では, この自動的な物神, 自分自身を増殖する価値, 貨幣をもたらす(生む)²⁰⁾貨幣が完成されている²¹⁾のであって, それはこの形態ではもはやその発生の痕跡を少しも帯びてはいないのである。社会的関係が, 物²²⁾の(貨幣の)それ自身²³⁾にたいする関係として完成されているのである。²⁴⁾²⁵⁾貨幣の資本への現実の転化に代わって, ここではただ, この転化の無内容な形態だけが現われている。労働能力²⁶⁾の場合と同じように, ここでは貨幣の使用価値は, 交換価値²⁷⁾を創造すること, しかも貨幣自身に含まれる²⁸⁾交換価値²⁹⁾よりも大きい交換価値を創造すること³⁰⁾になる。貨幣は可能的に[*δυναμει*], このような自己を増殖する価値として存在するのであり³¹⁾, そのようなものとして貸し付けられる(³²⁾これがこの独特な商品にとっての販売の形式なのである)³²⁾。³³⁾価値を創造するということ, 利子を生むということが貨幣の属性である³⁴⁾のは, 梨の実を生産する³⁵⁾ことが梨の木の属性であるのとまったく同じである。そして, このような利子を生む物として, 貨幣の貸し手³⁶⁾は自分の貨幣を売るのである。³⁷⁾そしてさらにそれ以上である。³⁸⁾すでに見たように, 現実に機能する³⁹⁾資本そのものが, 機能資本としてではなく, 資本それ自体として(⁴⁰⁾貨幣資本[moneyed capital]として)⁴⁰⁾利子を生むのだ, というように現われるのである。

1) 「また[und]」——削除。

2) 「両極 G_G' ——ここでの G' は $G+ΔG$ である——に短縮された定式 G_W_G' → 「両極 G_G' に短縮された, 定式 G_W_G' のなかの貨幣」

3) 「(つまり, $G_G+ΔG$)」——削除。なお, このうちの「 $G+ΔG$ 」の上には, スラーのような線がかけられている。

- 4) 「〔短縮された〔verkürzt〕 定式〕」——削除。
- 5) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「ここに見られるのは、資本の本源的な出发点——貨幣——であり、また、両極 G_G に短縮された定式 G_W_G である。より多くの貨幣をつくりだす貨幣。それは、1つの無意味な要約に収縮させられた、資本の本源的かつ一般的な定式である。」(MEGA, II/3.4, S. 1453)
- 6) 挿入——「また〔und〕」
- 7) 「生むもの」——草稿では *abwirft* となっているが、エンゲルス版でのように *abwerfend* とあるべきところである。
- 8) 「の媒介なしに〔ohne d. Vermittlung von〕」→「に媒介されないで〔unvermittelt durch〕」
- 9) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「これこそは、完成した資本——これによれば資本は生産過程と流通过程との統一〔である〕——、したがって一定の期間に一定の利潤をもたらすものである。利子生み資本の形態では、この規定が、生産過程および流通过程の媒介なしに、残っているだけである。」(MEGA, II/3.4, S. 1454)
- 10) 「商人資本では、利潤は交換から出てくる〔だからまた、収奪利潤〔profit upon expropriation〕〕ように見え、したがっていずれにせよ、物からではなくて社会的な関係から出てくるように見える。」——削除。
- 11) 「資本および利子では、」——削除。
- 12) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「とにかく、資本および利子では、資本が、利子の、自分の増加の、神秘的かつ自己創造的な源泉として完成されている、ということだけは明らかである。」(MEGA, II/3.4, S. 1454)
- 13) 「物」——エンゲルス版では、強調されている。
- 14) 挿入——「たんなる」
- 15) 挿入——「すでに」
- 16) 「生産過程および流通过程の総結果」→「総再生産過程の結果」
- 17) 「物に内在する〔d. Ding inhärent〕」→「物に自ずからそなわっている〔einem Ding von selbst zukommend〕」
- 18) 「そして、」——削除。
- 19) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「だが、いずれにせよこの形態は、それ自体として見るならば（じっさいには、貨幣は周期的に、労働を搾取し、剰余価値を生む手段として譲渡されるのである）、物がいまでは資本として現われ、また資本がたんなる物として現われ、資本主義的生産過程および流通过程の総結果が、物に内在する属性として現われる、という形態である。

そして、貨幣を貨幣として支出しようとするか、それとも資本として貸貸しようとするかは、貨幣の所持者、すなわちいつでも交換できる形態にある商品の所持者しだいである。」(MEGA, II/3.4, S. 1455)

- 20) 「もたらず (生む) [machend (heckend)]」→「生む [heckend]」
- 21) 「完成されている [vollendet sein]」→「純粹につくりあげられている [rein herausgearbeitet sein]」
- 22) 「物」d. Ding→eines Ding
- 23) 「自身」selber → selbet
- 24) この文の末尾は行末にあって、そのあとにすこし空きがあるが、次行の行頭は左に突き出していない。改行されていると見るべきかどうか、微妙である。エンゲルス版は改行していないので、それに従っておく。
- 25) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「利子生み資本では、この自動的な物神、自分自身を価値増殖する価値、貨幣をもたらず貨幣が完成されているのであって、それはこの形態ではもはやその発生の痕跡を少しも帯びてはいないのである。社会的関係が、物(貨幣、商品)のそれ自身にたいする関係として完成されているのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1454)
- 26) 「労働能力」→「労働力」
- 27) 「交換価値」→「価値」
- 28) 「含まれる」→「含まれている」
- 29) 「交換価値」→「価値」
- 30) 「こと」→「という使用価値」
- 31) 「貨幣は可能的に [δυναμει], このような自己を増殖する価値として存在するのであり」→「貨幣そのものがすでに潜勢的に [potentiell], 自己を増殖する価値なのであり」
- 32) 「(」および「)」——削除。
- 33) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「貨幣の資本への現実の転化に代わって、ここではただ、この転化の無内容な形態だけが現われている。労働能力の場合と同じように、ここでは貨幣の使用価値は、交換価値を創造すること、しかも貨幣自身に含まれる交換価値よりも大きい交換価値を創造することになる。貨幣は自己を増殖する価値として貸し付けられる。〔それは〕商品、だがまさにこの属性によって商品としての商品から区別され、したがってまた独自の譲渡形式をもつところの商品 [なのである]。』(MEGA, II/3.4, S. 1457)
- 34) 「である」→「となる」
- 35) 「生産する」→「結ぶ」
- 36) 「貨幣の貸し手」money lender→Geldverleiher

- 37) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「価値を創造するということ、利子を生むということがそれら〔貨幣または商品〕の内在的な属性であることは、梨の実を生産することが梨の木の属性であるのとまったく同じである。そして、このような利子を生む物として、貨幣の貸し手は自分の貨幣を産業資本家に売るのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1459)
- 38) 「そしてさらにそれ以上である。」→「それだけではまだ十分ではない。」
- 39) 「機能する」functionierend→fungierend マルクスは、「機能〔Funktion〕」(名詞)に対応する「機能する」という動詞としてはつねにfunctionierenを使っているが、エンゲルスはこの動詞を一貫してfungierenに変えている。以下、この原則によって行なわれている変更はいちいち注記しない。
- 40) 「() および ()」——削除。

次のこともねじ曲げられる。¹⁾——利子²⁾は利潤の、すなわち機能資本が労働者から搾り取る剰余価値の、一部³⁾でしかないのに、いまでは反対に、利子が資本の本来の果実、本源的な果実⁴⁾として現われ、利潤はいまでは企業利得という形態に転化して、たんに⁵⁾生産過程および流通過程⁶⁾でつけ加わるだけの附属品、⁷⁾付加物として現われる。ここでは資本の物神的な姿態と資本物神の観念とが完成している。⁸⁾ われわれがG—G'でもつのは、資本の無概念的な形態であり、最高の展相〔Potenz〕における、生産諸関係の転倒および物象化である。⁹⁾¹⁰⁾利子を生む姿態は、資本自身の生産過程¹¹⁾に前提されている資本の単純な姿態である。¹²⁾¹³⁾ 自分自身の価値を増殖するという、貨幣の、¹⁴⁾商品の能力——最もまばゆい形態での資本神秘化。|

- 1) 「次のこともねじ曲げられる。〔Es verdreht sich auch dies :〕」——岡崎訳では「これもまたねじ曲げられる」、長谷部訳では「このこともねじ歪められる」とされているが、diesはこれに続く部分を指すものと考えられる。
- 2) 「利子」Zins→der Zins
- 3) 「一部〔Teil〕」→「一部分〔ein Teil〕」
- 4) 「本源的な果実〔d. primitive〕」→「本源的なもの〔das Ursprüngliche〕」
- 5) 「たんに〔bloss〕」→「たんなる〔blosses〕」なお、草稿では、はじめ blosses と書いたのち、es を消して bloss にしている。
- 6) 「生産過程および流通過程」→「再生産過程」
- 7) 挿入——「および」

- 8) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「この形態では、いっさいの媒介が消え去っており、資本の物神的な姿態は、資本物神の観念と同様に、完成している。」(MEGA, II/3.4, S. 1460)
- 9) 草稿では、ピリオドで切られているが、エンゲルス版ではコロンに変えられている。
- 10) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「われわれが G_G' でもつのは、資本の無概念的な形態であり、最高の展相における、生産関係〔単数〕の転倒および物象化である。」(MEGA, II/3.4, S. 1460)
- 11) 「生産過程」→「再生産過程」
- 12) 草稿では、ピリオドで切られているが、エンゲルス版ではセミコロンに変えられている。
- 13) 挿入——「再生産にはかかわりなく」
- 14) 挿入——「または〔resp.〕」

[313上] 資本を価値、価値創造の自立した源泉として説明しようとする俗流経済学にとっては、もちろんこの形態はお詠え向きであって、この形態では、利潤の源泉はもはや認識できなくなっており、資本主義的生産過程の結果が——過程そのものからは切り離されて——自立的な定在を得ているのである。¹⁾

- 1) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「資本を価値、価値創造の自立した源泉として説明しようとする俗流経済学にとっては、もちろんこの形態はお詠え向きであって、この形態では、利潤の源泉はもはや認識できなくなっており、資本主義的過程の結果が——過程からは切り離されて——自立的な定在を得ているのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1460)

貨幣資本 [moneyed Capital] においてはじめて資本は商品になったのであって、この商品の自己自身を増殖するという質は、そのつどの利率で値づけされた確定価格をもっているのである。

利子生み資本として、しかも利子生み貨幣資本としてのその直接的形態において（ここではわれわれに関係のない他の利子生み資本諸形態はこの形態からさらに派生したものであってこの形態を前提するものである）、資本は、その純粋な物神形態 G_G' を、主体として、売ることのできる物として、得るのである。それは、第1には、資本がたえず貨幣として存

在することによってであって、この貨幣という形態では、資本のすべての規定性は消えてしまって資本の実体的な諸要素は目に見えなくなっているのである。じつに貨幣こそは、そこではもろもろの使用価値としてのもろもろの商品の区別が消え去っており、したがってまたこれらの商品やその存在諸条件¹⁾から成っているもろもろの生産資本²⁾の区別も消え去っている形態、³⁾資本が自立的な交換価値として存在する形態なのである。⁴⁾資本の実体的な過程⁵⁾では、貨幣形態は、すぐに消えてしまう形態⁶⁾である。⁷⁾貨幣市場では、資本はつねにこの形態で存在するのである。第2に、資本によって生み出される剰余価値も、⁸⁾ふたたび貨幣の形態にあって、資本そのものに属するものとして現われる。生長が樹木⁹⁾に固有であるように、貨幣を生むこと(τόκος)が貨幣資本としてこの形態にある資本に固有なことなのである¹⁰⁾。¹¹⁾

- 1) 「存在諸条件 [Existenzbedingungen]」→「生産諸条件」
- 2) 「生産資本」→「産業資本」
- 3) 草稿ではここに「) 」があるが、対応する「 (」は見当たらない。
- 4) 「資本が [es] 自立的な交換価値として存在する形態なのである。」→「なのである。貨幣は、価値が——そしてここでは資本が——自立的な交換価値として存在する形態である。」
- 5) 「実体的な [real] 過程」→「再生産過程」
- 6) 挿入——「であり、たんなる通過契機」
- 7) 挿入——「これに反して、」
- 8) 挿入——「ここでは」
- 9) 「樹木」 Baum→Bäume
- 10) 「なのである [so das Geldzeugen...eigen.]」→「として現われる [so scheint das Geldzeugen...eigen.]」
- 11) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「それゆえ、利子生み資本として、しかも利子生み貨幣資本としてのその直接的形態において(ここではわれわれにかかわりのない他の利子生み資本諸形態はこの形態からさらに派生したものであってこの形態を前提するものである)、資本は、その純粋な物神形態 G_G' を得たのである。それは、第1には、資本がたえず貨幣として存在することによってであって、この貨幣という形態では、資本のすべての規定性は消えてしまって資本の実体的な諸要素は目に見えなくなっており、資本は

自立的な交換価値のたんなる定在として、自立化された価値として存在するのである。資本の実体的な過程では、貨幣形態は、すぐに消えてしまう形態である。貨幣市場では、資本はつねにこの形態で存在するのである。第2に、資本によって生み出される剰余価値も、ふたたび貨幣の形態にあって、資本そのものに属するものとして現われ、それゆえ貨幣資本の、すなわち資本の過程から分離された資本の、たんなる所有者に属するものとして現われる。G_W_GはここではG_Gになり、しかも、資本の形態がここでは無区別な貨幣形態であるように——じつに貨幣こそは、使用価値としての諸商品の相違が消え去っている形態であり、したがってまた、これらの商品の存在条件から成っている生産諸資本の相違、生産諸資本の特殊な形態そのものも消え去っている形態である——、この資本が生み出す剰余価値も、つまり剰余貨幣も、なにがそれになるのか、またはなにがそれであるのかを問わず、貨幣額そのものの大ききで計られた特定の率において現われるのである。利子が5% [ならば]、資本としての100は105である。このように [それは]、自己を増殖する価値の、または貨幣を創造する貨幣の、まったく明白な形態 [である]。同時に、まったく無思想な形態 [である]。不可解な、神秘化された形態 [である]。資本の展開では、われわれはG_W_Gから出発したが、G_G'はこのG_W_Gの結果でしかなかった。いまやわれわれは、G—G'を主体として見いだす。生長が樹木に固有であるように、貨幣を生むこと (τόκος) が貨幣というこの純粋な形態にある資本に固有なことなのである。われわれが表面で眼前に見いだす、だからまたわれわれが分析において出発点とした、不可解な形態を、われわれはふたたび過程の結果として見いだすのであって、この過程では、資本の姿態は次第にますます疎外されたものになり、資本の内的な本質への連関がますますないものになっていくのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1464)

利子生み資本では、資本の運動が短いものに縮約されている。媒介過程は省略されており、こうしてたとえば¹⁾ 1000という資本²⁾ は、それ自体として1000³⁾ であるが或る期間のうちに1100に転化する1つの物として、固定されている。それは、ちょうど、葡萄酒を穴蔵に入れておけば、ある時間の後にはその使用価値もよくなるというようなものである。資本はいまでは物であるが、しかし、物として資本である。貨幣はいまでは胸に恋を抱いている。貨幣が貸し付けられさえすれば、または再生産過程のなかにあり⁴⁾ さえすれば (それが、産業利潤⁵⁾ とは別に、⁶⁾所有者としての機能資本家のために利子をもたらずかぎりでは⁷⁾)、それが寝ていようと起きて

いようと、家にいようと旅をしていようと、夜であろうと昼であろうと、それには利子が生える。⁸⁾こうして、利子生み貨幣資本では {そしてすべて資本はその価値表現から見れば貨幣資本であり、言い換えれば、いまでは貨幣資本の表現として意義をもつ}、貨幣蓄蔵者の敬虔な願望が実現されているのである。⁹⁾

- 1) 「たとえば」——削除。
- 2) 「1000という資本」d. Capital 1000→ein Kapital=1000
- 3) 草稿では1100と誤記されており、1894年版でもそのままであったが、現行版では訂正されている。
- 4) 「あり [vorhanden [sein]]」→「投下されてい [angelegt [sein]]」
- 5) 「産業利潤」→「企業者利得」
- 6) 挿入——「そのの」
- 7) 「かぎりでは」so weit→insofern
- 8) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「利子生み資本では、資本の運動が短いものに縮約されている。媒介過程は省略されており、こうしてたとえば1000という資本は、それ自体として1000であるが或る期間のうちに1100に転化する1つの物として、固定されている。それは、ちょうど、葡萄酒を穴蔵に入れておけば、ある時間の後にはその使用価値もよくなるというようなものである。資本はいまでは物であるが、しかし、物として資本である。だから、それは他のすべての商品と並んで特殊的商品として売られることができる。あるいはむしろ、いまでは貨幣、商品が資本として売られることができるのである。これは、最も自立化された形態における資本の現象である。貨幣はいまでは胸に恋を抱いている。貨幣が貸し付けられさえすれば、——または生産過程のなかにありさえすれば(すなわち、それが、利潤とは別に、産業家のために利子をもたらすかぎりでは)——、それが寝ていようと起きていようと、夜であろうと昼であろうと、それには利子が生える。」(MEGA, II/3.4, S. 1521-1522)
- 9) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「利子生み貨幣資本では、貨幣蓄蔵者の敬虔な願望が実現されている。」(MEGA, II/3.4, S. 1522)

このように、利子が《物としての》貨幣資本に生え込むこと¹⁾(ここでは資本による剰余価値の産出²⁾がこういうものとして現われる³⁾)、これこそが、ルターを忙しく、高利にたいして⁴⁾素朴にがみがみ言わせているものである。⁵⁾ルターは、定めた期日に⁶⁾返済されないために⁷⁾、自分でも支

払をしなければならぬ貸し手にとって出費が生じる場合とか、あるいは
 (かりに貨幣が適時に返済されたとすれば)⁸⁾(⁹⁾たとえば畑などを⁹⁾買う
 ことによってあげることができたはずの利潤が借り手のとがによって¹⁰⁾失
 われたような場合には、利子を要求してもよいということを述べたあとで、
 次のように続けている。——¹¹⁾「私があなたにそれ(100 グルデン)を貸
 したとき、あなたは、私がこちらでは支払ができず、あちらでは買うこと
 ができず、したがって両方で損害をしなければならぬという双子の損害
 [einen Zwilling aus dem Schadewacht]¹²⁾を私に与えている。これが、
 生じた損害と逃げた利得 [damni emergentise et lucri cessantis]¹³⁾と
 いう二重の差損 [duplex interesse]¹³⁾と呼ばれるのである。……ハン
 スが100 グルデンを貸して損害を受けたのでその損害の正当な賠償を求め
 るということを聞くと、彼らとはびこんできて、どの100 グルデンにもこ
 のような二重の損害 [zween Schadewacht]、すなわち支払のための出費と
 しそくなった畑の購入という損害をかぶせるのである。それは、ちょうど、
100グルデンには自然にこのような二重の損失 [zween Schadewacht]
が生え込んでいる¹⁴⁾かのようである。こうして、100グルデンがあれば、
 彼らはこれを貸して、それにたいして、彼らがこうむってもいないこの二
 重の損害 [zween Schaden] を計算するのである。……それゆえ、だれ
 があなたに加えたのでもなく、したがって証明も計算もできないあなたの
 偽りの損害を隣人の貨幣で償うあなたこそは、高利貸なのである。このよ
 うな損害を法律家たちは、真実のではない架空の損害 [non verum, sed
fantasticum interesse]と呼んでいる。各人が自分に加えられたと想像
 する損害……。それゆえ、私が支払うことも買うこともできなかつたとい
 う損害が||314上|生じるかもしれない、と言ってもむだである。それは、
偶然事を必然事にし [ex contingente necessarium]、存在しないもの
 を存在しなければならぬものにし、不確実なものをまったく確実にする
 ことである。このような高利はわずかな年月で世界を食い尽くすのではな

いだろうか?……貸し手の意志によらないで彼をおそった偶然の不幸ならば、彼はその償いを受けなければならない。しかし、商業では逆であり正反対であって、そこでは、貧しい隣人を相手に損害をでっちあげ、こうしてなんの心配も危険も損害もなしに他の人々の労働によって、生活し、金持になり、自分はなにもしないでぜいたくをしようとする。私が炉辺に坐して私の100グルデンに国中で私のために稼がせ、しかもそれが貸した貨幣であるために、なんの危険も心配もなしにそれを財布のなかに確保するとすれば、友よ、だれかこれを望まないひとがあるだろうか?」^(a)/

- 1) 「物としての貨幣資本に生え込むこと [Eingewachsen...in d. Geldcapital als ein Ding]」→「物に生え込むように貨幣資本に生え込んでいること [Eingewachsensein...in das Geldkapital als in ein Ding]」
- 2) 「産出 [Setzen]」→「生産 [Produktion]」
- 3) 「ここでは…… [worin]」→「……ように [wie]」
- 4) 挿入——「あのよう [so]」
- 5) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「このように利子がじかに資本に生え込んでいることに反対する、ルターの素朴な論争。」(MEGA, II/3.4, S. 1522)
- 6) 「に」 zu→an
- 7) 「返済されないために」 aus d. Nichtzahlen→aus der nichterfolgten Rückzahlung
- 8) 「(かりに貨幣が適時に返済されたとすれば)」——削除。
- 9) 「(」および「)」——削除。
- 10) 「借り手のとがによって [durch d. Schuld des Borgers]」→「いま述べた理由から [aus diesem Grunde]」
- 11) 以下の引用は、マルティン・ルターの『牧師諸氏へ、高利に反対して……』、ヴィッテンベルク、1540年、からのものであるが、『1861—1863年草稿』のノート第15冊の「収入とその諸源泉」のなかに、「損害賠償としての利子 [Zins als Schadenersatz]」という表題のもとに同書からのかなり長い引用 (MEGA, II/3.4, S. 1534-1537) があり、その前半に、ここで引用されている部分が含まれている。なお、ルターからの後出の引用 (本稿、84-85ページ) も、その後半から採られている。
- 12) 「私がこちらでは支払ができず、あちらでは買うことができず、したがって両方で損をしなければならないという双子の損害 [einen Zwilling aus dem

Schadewacht]) —— 「支払ができない」ことから生じる損害については、これより前のところでマルクスが「借り手自身が支払ができなかったために生じた裁判費用等々のこと」という説明を与えている。「買うことができない」ことから生じる損害とは、買いたいものを買うことを断念しなければならないことから損害が生じるということである。貨幣を貸した結果、貸し手にこのような二重の損害が生じたというのである。

ここで、『1861—1863年草稿』の『資本論草稿集』での訳語にならって「損害」とした Schadewacht は、Grimm の Deutsches Wörterbuch では、Schade (Schade (=Schaden) にはかつては「利子」という意味もあった) の Wacht (監視) というところからきた、「ある高利貸の名として」使われた語だとされている。ルターのここでの用法は、その原義を完全には失わないながらも、もっと一般的な概念として、だから普通名詞として使われている。このあとで2度、solche zween Schadewacht (そのような二重の損害) と言い換えているこの「双子の損害」を、ルターがそのあとでさらに2度 zween Schaden と呼んでいることからわかるように、ここでは事実上、Schadewacht は Schade とほとんど同じ意味で使われているのである。

- 13) 「生じた損害と逃げた利得 [damni emergentise et lucri cessantis] という 二重の差損 [duplex interesse] —— ルターはこの前のところで、「あなたが元金も Schade [前注に述べたように、Schade には「損害」の意味のほかに「利子」の意味があったが、ここではその両者の意味が込められている] もいっさいを私に返済するのが、理性からも自然の法からも正当である。……このような Schadewacht を法律書はラテン語で Interesse と呼んでいる。」と書いていた。この interesse および「生じた損害と逃げた利得 [damni emergentise et lucri cessantis]」については、次の記述を参照されたい。——「ローマの法律家やその考えを継承した初期の教会法学者たちは、差額という意味をもつ interesse を usura (利子) とは質的に異なるものと考えていた。usura は貸付金に対する特別な支払いとして禁止されたが、interesse のほうは、何らかの契約で被害を受けた側の損害賠償(金)という意味で許された。すなわち、なにか補償的なものとされたのである。今日理解されている意味での、すなわち、貸付金に対して当然に支払われるべきものとしての interesse (利子) は、14世紀の若干の教会法学者や神学者たちによって、きわめて徐々に damnum emergens (蒙った損害の賠償) とか、lucrum cessans (失われた利益) という名前で弁護されるようになった。この新しい変化は、主としてイタリアの諸都市で営まれた金融業務を正当化する必要から起こった。interest 正式認可への第一歩は1516年、ラテラノ公会議における教皇レオ十世の大教書

であった。この大教書は *montes pietatis* (敬虔の山) という公共の質屋を認可し、そこにおいて低利の利子が課せられることを容認した。(ルター『商業と高利』、魚住昌良訳、『世界の名著』第18巻「ルター」、中央公論社、1969年、所収。同書369ページの訳者による注。)

- 14) 「自然にこのような二重の損失が生え込んでいる」——エンゲルス版でも、強調されている。

[314下|〔原注〕a) M. ルター『牧師諸氏へ、高利に反対して、云々』、ヴィッテンベルク、1540年。¹⁾〔原注a)の終り〕/

- 1) エンゲルス版では、この出典は上の引用箇所末尾に組み込まれている。

/314上/¹⁾ 資本とは、永続し²⁾ 増大する価値としてのその生来の質³⁾——スコラ学の隠れた質⁴⁾——⁵⁾によって自分自身を再生産⁶⁾する価値であるという観念は、錬金術師たちの空想も遠く及ばない作り話的なドクター・プライスの思いつきを生みださせたが、その思いつきをピットは本気で信用して、減債基金に関する彼の法律のなかで彼の財政⁷⁾の支柱にした。

- 1) ここから、本稿88ページ下から6行目までは、『1861—1863年草稿』のノート第18冊の最初のところに書かれた部分(草稿1066-1068ページ, MEGA, II/3.5, S. 1746-1749. 編集者によって「複利」という表題が付けられている)とはほぼ一致している。以下の注記ではその部分との相違も記載しておく。この部分の最初にあるプライスについての記述に、MEGA は次のような「注解」を付けている。「マルクスは、ノート第14冊で複利を論じたさいに、「プライスの幻想には、収入とその諸源泉とに関する項目〔Abschnitt〕のなかで立ち返ること」と書いている (MEGA, II/3.4,] 1372ページを見よ)。ここではじめて、彼はそれに立ち返っており、『要綱』(MEGA, II/1.2, S. 707) から、わずかな言葉上の変更を加えて、複利についてのプライスの見解の自分の評価を採り入れている。」(MEGA, II/3.4, S. 3026) じっさい、本稿80ページ下から11行目までは、『要綱』のその箇所に、ほとんどそのままのかたちで見ることができる。なお『1861—1863年草稿』では、冒頭に「複利に関する事柄についてはさらに次のことを——」と書かれている。
- 2) 『1861—1863年草稿』ではここに「年々」と書かれている。
- 3) 「永続し増大する価値としてのその生来の質」 *its innate quality as a perennial and growing value* → *seine eingeborne Eigenschaft als ewig währender und wachsender Wert*

- 4) 「スコラ学の隠れた質」→「つまりスコラ学者の言う隠れた質」
 5) 「——スコラ学の隠れた質——」——『1861—1863年草稿』にはない。
 6) 挿入——「し再生産のなかで自己を増殖」
 7) 「財政〔Finanzwirtschaft〕」——『要綱』でも、『1861—1863年草稿』でも、「財政の知恵〔Finanzweisheit〕」となっていた。もしかすると、マルクスが本草稿に転記するさい、『1861—1863年草稿』の *weisheit* を *wirtschaft* と読み誤ったのかもしれない。

「復利を生む貨幣ははじめはゆっくりふえてゆく。しかし、ふえる率はだんだん速くなってゆくので、ある期間がたてば、どんな想像力でもあざ笑うような速さになる。われわれの救世主が生まれたときに5%の復利で貸し出された1ペニーは、いままでに、すべて純金から成っている1億5千万個の地球に含まれている¹⁾よりもっと大きな額に増大しているであろう。しかし、単利で貸し出されたとすれば、同じ期間にたった7シリング44ペンスにしかふえていないであろう。今日までわが国の政府は、これらの方法のうちの前者よりも後者によって貨幣を利用する〔improve money〕ことを選んできたのである。」^(b)/

- 1) 「含まれている」——草稿では *obtained* となっているが、『要綱』でも『1861—1863年草稿』でも *contained* となっている。エンゲルス版も *enthalten* としている。マルクスの誤記であろう。

/314下/〔原注 b〕¹⁾ リチャード・プライス『国債問題について公衆に訴える』、ロンドン、1772年、第2版。彼の素朴な機知はこうである、——「要は、貨幣を単利で借りて、複利で利用することだ。〔It is borrowing money at simple interest, in order to improve it at compound interest.〕」(ハミルトン (R.) 『大ブリテンの国債の起源と発達云々に関する研究』、第2版、エディンバラ、1814年、133ページ。) ²⁾ これによれば、およそ借金は私人にとっても最も確実な致富手段であろう。しかし、もし私がかたとえば100ポンドを年利5%で借りる³⁾とすれば、私は年末には5%⁴⁾を支払わなければならないのであって、かりにこの借り⁵⁾が1億年続

くとしても、そのあいだ私は毎年末には⁶⁾ いつでもただ100ポンドだけしか貸す⁷⁾ ことができないのであり、やはり毎年末には5%を⁸⁾ 支払わなければならないのである。このやり方では、私はいつまでたっても100ポンドを借りる⁹⁾ ことによって105ポンドを貸す¹⁰⁾ ことができるようにはならない。しかも、いったいなにからこの5%を支払う¹¹⁾ のか? 借金¹²⁾ によってであり、あるいはもし¹³⁾ 国家なら、租税によってである。しかし、産業資本家が借りる¹⁴⁾ 場合には、彼は、利潤がたとえば15%ならば、5%を利子として支払い、5%を食い尽くし¹⁵⁾ ——¹⁶⁾ といっても彼の食い物の質¹⁷⁾ は収入につれて成長するのであるが——¹⁸⁾、5%を資本化しなければならぬ。だから、つねに5%《の利子》を支払って行くためにも、すでに15%の利潤が前提されているのである。もしこの過程が続けば、可変資本が不変資本に対立して減少し、したがって利潤が下落するがゆえに¹⁹⁾、利潤率は、たとえば15%から10%に下がる。ところが、プライスは、5%の利子が15%の利潤率を前提することをすっかり忘れてしまって、この利潤率が資本の蓄積といっしょに続くものとしているのである。貨幣が複利で還流する²⁰⁾ ためには、彼は現実の蓄積過程にかかわる必要はまったくないのであって、ただ貨幣を貸し出しさえすればよいのである。どこから、ということ²¹⁾ は、彼にとってはまったくどうでもよい。というのは²²⁾、このことは利子生み資本の生来の質²³⁾ なのだからである。〔原注b)の終り〕/

1) エンゲルス版では、この注は脚注とされている。

2) 「彼の素朴な機知はこうである」以下ここまでの部分は、『1861—1863年草稿』では、「(彼の機知 [は次の通り] —— 政府は、単利で借りて、借りた貨幣を複利で投下すべきだというのだ。)」となっている。このうちの「投下する [auslegen]」は、『要綱』では「貸し出す [ausborgen]」となっていた。なお、本注のこれ以下の部分は『要綱』にも『1861—1863年草稿』にもない。

3) 「借りる」pumpen→aufnehmen

4) 「5%」→「5ポンド」

5) 「借り [Pump]」→「前貸 [Vorschuß]」

6) 「毎年末には」→「毎年」

- 7) 「貸す」 verpumpen→ausleihen
- 8) 「毎年末には5%を」→「毎年5ポンドを」
- 9) 「借りる」 pumpen→aufnehmen
- 10) 「貸す」 verpumpen→ausleihen
- 11) 「支払う」→「支払えばよい」
- 12) 「借金 [Pumpen]」→「新しい借金 [neue Anleihen]」
- 13) 挿入——「私が」
- 14) 「借りる」 pumpen→aufnehmen
- 15) 「食い尽くし [auffressen]」→「消費し [verzehren]」
- 16) 「——」→「(」
- 17) 「食いの質 [Fressqualität]」→「食欲」
- 18) 「——」→「)」
- 19) 「可変資本が不変資本に対立して減少し、したがって利潤が下落するがゆえに」→「すでに述べた理由によって」
- 20) 「還流する」 retourniren→zurückfließen
- 21) 「どこから、ということ [woher]」→「貨幣がどうして複利で還流し始めるか」
- 22) 挿入——「なにしろ [ja]」
- 23) 「生来の質」 d. innate quality→die eingeborne Qualität

/314上/ 彼はその著『生残年金に関する考察、云々』、ロンドン、1782年¹⁾、のなかではもっと空高く飛んでいる。「われわれの救世主が生まれた年に〔 〕」（というのだから、たぶんエルサレムの聖堂のなかで)²⁾〔「 〕6%の複利で貸された1シリングは、全太陽系を土星の軌道の直径に等しい直径をもつ1つの球にした場合に包含できるであろうよりも、もっと大きい金額に増大しているであろう。』³⁾「だからといって国家が財政困難の状態にある必要はけっしてない。というのは国家は、最小の貯蓄で最大の負債を、国家の利益が要求しうるかぎりの短い期間で皆済できるのだからである。』⁴⁾なんというけっこうな、イギリス国債への理論的手引きであろう！⁵⁾/

1) 「1782年」——1894年版でもこうなっていたが、現行版では「1772年」と訂正されている。この誤りは、『要綱』から『1861—1863年草稿』に書き写すと

きに生じたものであった。

- 2) 「(というのだから、たぶんエルサレムの聖堂のなかで)」——これは『要綱』にも『1861—1863年草稿』にもない。
- 3) 「なんというけっこうな、イギリス国債への理論の手引きであろう！」——『1861—1863年草稿』では、「ここから、なんというけっこうな諸原理が信心深いピットにとって明らかになったことであろう！」となっている。『要綱』にはこの部分はない。

/314下/〔原注〕c) 同前¹⁾。

〔原注〕d) 同前, 136ページ²⁾。

{ ノートで確かめること。³⁾
〔原注 c) および d) の終り〕 /

- 1) エンゲルス版では、この注は削られている。なお、草稿ではここに「注〔Notes〕」と書いたのち、消している。
- 2) 「136ページ」——1894年版では、引用のあとに「136ページ」と書かれているが、現行版では、同じく引用のあとに「p. XIII, XIV」と書かれている。
- 3) 「ノートで確かめること〔Nachzusehen im Hefte〕。」——前述のように、マルクスはここで、『1861—1863年草稿』のノート第18冊を見ながら書いていたのであり、しかもそこには、ブライスからのこの2つの引用の典拠ページが、注c)にあたるところに「XIII, 注〔Note〕」、注d)にあたるところに「XIV, p. 136」と記されていて、後者については「p. 136」はそのままここに転記しているのであるから、ここで「ノート」と書いているのは、おそらく、彼がブライスから最初に抜萃したときの引用ノート(ロンドン・ノート第16冊)のことであろうと思われる(『要綱』では、注c)にあたるところには「XIII, 注」、注d)にあたるところには「p. XIII-XIV」と書かれていた)。彼がなぜ、「ノートで確かめる」必要を感じたのかは、ブライスの著書とロンドン・ノート第16冊(未刊)とを見れば推測できるかもしれないが、筆者はどちらも未見なので、いまのところ不明である。同様に、本草稿では「136ページ」、現行版では、「p. XIII, XIV」、『1861—1863年草稿』では「XIII, 注」および「XIV, p. 136」、となっていることをどう理解すべきかも不明である。

/314上/ ブライスは、幾何級数から生じる巨大な数¹⁾に簡単に眩惑されてしまったのである。彼は資本を、再生産と労働との諸条件²⁾を顧慮することなく、自動的に動く自動機構³⁾とみなし、たんなる自己増殖する数と

みなした（マルサスが人間を幾何級数的にふえるものとみなしたのとまったく同様に）ので、資本の増大の諸法則⁴⁾を $S=c(1+i)^n$ ⁵⁾ という定式において発見したと妄想することができたのである。この S ⁶⁾ は資本・プラス・複利の合計、 c は前貸資本、 i ⁷⁾ は利率（100 の可除部分⁸⁾）、 n はこの過程が続く年数である。

- 1) 「巨大な数 [the enormous numbers]」→「数の巨大さ」 『要綱』および『1861—1863年草稿』では、「数」は「量 [quantities]」となっている。
- 2) 「再生産と労働との諸条件 [the conditions of reproduction and labour]」——『要綱』でも『1861—1863年草稿』でも、「労働の再生産の諸条件 [the conditions of reproduction of labour]」となっている。
- 3) 「自動的に動く自動機構 [a self-acting automaton]」——『要綱』でも『1861—1863年草稿』でも、「自動的に動くもの [a self-acting thing]」となっている。
- 4) 「諸法則 [d. Gesetze]」→「法則 [das Gesetz]」
- 5) 「 $S=c(1+i)^n$ 」→「 $s=c(1+z)^n$ 」
- 6) 「 S 」→「 s 」
- 7) 「 i 」→「 z 」
- 8) 挿入——「で表わしたもの」

ピットは、1792年に、減債基金にあてる金額の増額を提案した演説のなかで、¹⁾ ドクター・プライスのごまかしをすっかり真に受けている。「²⁾ 1786年に下院で、公益のために100万ポンドが徴税されるべきことが全会一致で決議された³⁾。」²⁾ [ローダデイル、175ページ]⁶⁾ ピットが信じていたプライスの説によれば、人民に課税し、この税金によって⁴⁾ 取り立てられた金額を「蓄積する」ことにまざる、だからまた⁵⁾ 国債を複利の秘法によってすばやく退治してしまうのにまざる上策は、もちろんなかったのである。ここから減債基金または償却基金のための徴税が生まれた⁶⁾。⁷⁾ 「⁸⁾ 前述の決議に続いて、まもなく1つの法律——起草者はピット——¹⁰⁾ が制定されたが、それは、¹¹⁾ 満期になった年金を含めて、基金が年額400万ポンドに増大するまで、¹²⁾ 25万ポンドを蓄積することを命じていた。」⁸⁾ [ローダデイル、176ページ]（ジョージ3世第26年の法律第22号¹³⁾）ピッ

トは、減債基金にあてる金額を増額することを提案した彼の1792年の演説のなかで、イギリスの商業的優越の原因として機械や信用などをあげたが、しかし、「最も広範囲で最も永続的な原因は蓄積である。¹⁴⁾ところで¹⁵⁾、この原理はあの天才スミスの著作のなかで完全に展開され十分に説明されている、云々¹⁶⁾。……このような||315上|資本蓄積は、少なくとも年間利潤の一部分を蓄えて元本をふやし、この元本を次の年にも同じ仕方で利用し、こうして継続的な利潤をあげるようにすることによって、もたらされる。」[ローダデイル, 178-179ページ] ピットは、ドクター・プライスの仲介によって、スミスの蓄積理論を負債の蓄積による人民の致富に転化させ、借金、借金を払うための借金、等々¹⁷⁾という、楽しい無限進行¹⁸⁾に到達するのである。¹⁹⁾/

- 1) 「1792年に、減債基金にあてる金額の増額を提案した演説のなかで、」——削除。
- 2) 「「」および「」」削除。
- 3) 「下院で……が決議された」→「下院が……を決議した」
- 4) 「この税金によって」→「こうして」
- 5) 「だからまた [u. daher]」→「こうして [und so]」『1861—1863年草稿』では「これによってまた [und damit]」となっている。
- 6) 「ここから減債基金または償却基金のための徴税が生まれた [Daher Steuern f. d. sinking funds od. Amortissement funds.]」——『1861—1863年草稿』では、たんに「減債基金または償却基金のための徴税」となっている。
- 7) 「ここから減債基金または償却基金のための税金が生まれた。」——削除。
- 8) 「「」および「」」——削除。
- 9) 挿入——「下院の」
- 10) 「1つの法律——起草者はピット——」→「ピットの発議による1つの法律」
- 11) 挿入——「「」
- 12) 挿入——「」」
- 13) 「ジョージ3世第26年の法律第22号」——草稿では、ch. XXII Act 26 Georg III となっている。エンゲルス版でも、Act 26, Georg III. Kap. 22. となっているが、現行版では、Kap. 22 が Kap. 31 に訂正されている。『1861—1863年草稿』では、ch. XXXI となっていた。マルクスの転記ミスであろう。
- 14) 「「最も広範囲で最も永続的な原因は蓄積である。」→「「最も広範囲で最も永

統的な原因」として「蓄積」をあげた。」

- 15) 「ところで [nun]」——MEGA によれば、『1861—1863年草稿』では nur と なっているとされているが、これは解説の誤りで、ここでのように nun と な っているのではないかと思われる。
- 16) 「, 云々」——削除。
- 17) 「等々」——削除。
- 18) 「無限進行」——Progress in infinitum→Progreß ins Unendliche
- 19) この1文は、『1861—1863年草稿』では、「ビットはプライスの、利子からの 利子、つまり複利計算を、A. スミスの蓄積論と同一視した。このことは重要 である。」となっている。

/314下/〔原注〕e) ローダデイル [『公の富の性質と起源……に関する 研究』] (フランス語訳), 175ページ。¹⁾〔原注 e) の終り〕 |

- 1) エンゲルス版では、この出典は（したがってこの注は）削除されている。な お、この原注の引用はすべてローダデイルの上の書からのものであることが、 『1861—1863年草稿』の MEGA 版で確定されている。そのページを上のテキ ストに [] で挿入しておいた。これらの引用は、カウツキー版が「出所を確 認できず」とし、現行版も出典およびそのページを挙げていなかった。マルク スの引用は要約であり、原文とは異なっているところがある。ローダデイルの 原文は MEGA の「注解」に記載されている。

/315上/¹⁾われわれはすでに近代の銀行業の父²⁾ ジョサイア・チャイルド の言葉のうちに次のことを見いだす。「100ポンドは複利でふやせば、70年 で102,400ポンドを生むであろう。」³⁾(a)/

- 1) 『1861—1863年草稿』では、この前に、次のパラグラフがあとから書き加え られている。——「ちなみに、ロンドンの銀行業の祖 [Urvater des Londoner Banquierthums] チャイルドは高利貸の「独占」の敵対者であったが、それは モーゼス・アンド・サンがその報告書のなかで、自分たちは小裁縫業者たちの 「独占価格」の反対者だ、と宣言しているのとまったく同じ意味においてであ った。」
- 2) 「近代の銀行業の父 [Vater d. modernen Bankierthums]」——『1861— 1863年草稿』では、「ロンドンの銀行業の父 [Vater des Londoner Banquier- thums]」となっている。
- 3) 『1861—1863年草稿』では、この引用のあとに次の記述がある。——「蓄積

の最初の理解は貨幣蓄蔵のそれであって、ちょうど資本の最初の理解が商業資本としてのそれであるのと同様である。第2の理解は複利のそれであって、利子生み資本または利子つきでの貨幣の貸付が資本の第2の歴史的形態であるのと同様である。経済学がときどき当惑するのは、資本の蓄積とによっての複利の場合がそうであるように、資本主義的生産に特有な諸関係の洪水前期的な諸表現が資本主義的生産に特有な諸関係の諸表現としてふたたび通用する場合である。」なお、三宅義夫氏は、マルクスがここで、ジョサイア・チャイルドを「ロンドンの銀行業の祖」または「ロンドンの銀行業の父」および「近代の銀行業の父」と呼んでいることについて、マルクスはジョサイア・チャイルドをフランシス・チャイルドと「とりちがえたものと考えられる」とされている(『マルクス信用論体系』、日本評論社、1970年、124-125ページ)。

1315下| [原注] a) 『商業に関する論考および金利引下げから生じる利益に関する論考, Jos. チャイルド著……訳』, アムステルダムおよびベルリン, 1754年。(1669年執筆。)(115ページ以下。)¹⁾ [原注 a) の終り] /

1) エンゲルス版では、この出典は引用の末尾に付けられている。

/315上/ ドクター・プライスの見解が現代の経済学に¹⁾ 無思慮に紛れ込んでいる様子は、『エコノミスト』からの次の個所が²⁾ 示している。——

「³⁾資本は、貯蓄された資本のすべての部分にたいする複利によって、あらゆるものを独り占めにしてゆくものなのであって、人々が所得を引き出してくる世界の富はすべてずっと前から資本の利子になっているほどである。……⁴⁾すべての地代《(土地の)⁵⁾》は、いまでは、以前に土地に投下された資本にたいする利子の支払である。」⁶⁾(b)⁷⁾ /

1) 「現代の経済学に」——マルクスは、はじめ bei modernen Oekonomist [en] (経済学者たち)と書きかけたのち、Oekonomistの末尾のstをeに直してOekonomieとした。そのさい同時にmodernenをmodernerに変更すべきところを忘れたために、bei modernen Oekonomieとなっている。なお、『1861—1863年草稿』では、「現代の相対的に批判的な経済学者たちに [bei modernen, und relativ kritischen Oekonomen]」となっている。

2) 『エコノミスト』からの次の個所が → 『エコノミスト』が次の個所で

- 3) 『1861—1863年草稿』では、このまえに次の部分が引用されている。——「イギリスで、土地がその権利や特権のすべてとともに何度も何度も繰り返して売買された（だからまた、彼が非常にお利口に結論しているように、「それにたいして支払われる貨幣に代わるたんなる代表物となった」）ことがなかった事例がある——こういうことは信じかねるが——とすれば、われわれは……地代として支払われるそれぞれの6ペンスが、土地が売られることのなかったそのような場合に地主によって貯蓄されそして土地に再投資された資本の代表物であることを……疑うものではない。……」
- 4) 『1861—1863年草稿』では、この「……」にあたる部分、つまり「土地は或る場所では他の場所でよりも価値があるとしても」が書かれている。
- 5) 「(土地の)」——削除。これは、すぐまえの rent が「地代」の意味であることを明示するために挿入されたものであろう。
- 6) 『1861—1863年草稿』では、このあとに次のように書かれている。——「同じ作り話的な観念をもってすれば、『エコノミスト』は、無数の年月のあいだに実現されうる労働はすべて、これまでに蓄積された資本に支払われるべき利子を代表するにすぎない、と言うこともできたであろう。私がこの箇所を引用するのは、ただ、蓄積＝複利という作り話的な観念のためにすぎない。それとは別に、ついでながら、『エコノミスト』の同号は次のように述べている。すなわち、「共同団体 [a corporate body] としての」社会それ自体 [the community as such] は「……土地（共同財産としての）への権利を主張するのであって、その権利をけっして手放さない」。資本を土地の購入に支出する人は「じつは、狭義かつ固有の動産に属する利益のうちのいくらかを、社会 [the community] に没収され引き渡すのである。」（同前）
- 7) 1894年版では、ここで改行されていない。

/315下/〔原注〕b) 『エコノミスト』、1859年¹⁾ 7月19日。²⁾ ³⁾⁴⁾⁵⁾ この個所と次のルターとを比べてみられたい。《同前。》「つまりこの地上には、悪魔に次いで、守銭奴の高利貸にまさる人類の大敵はいない。なぜなら、彼は、万人の上に神として君臨したがつているのだからである。トルコ人や戦争屋や暴君も悪人ではあるが、それでも彼らは、人々を生かしておかなければならないし、自分が悪人であり敵であることを認めないわけにはいかない。また彼らはおそらく、時には幾らかの人々を憐れむこともあろう。いやむしろ、そうせざるを得ない。しかし、高利貸の欲張りめとなると、

こいつが望むのは、いっさいを独り占めにできるように、彼の力の及ぶかぎり、全世界(「世界中のすべての富 [all the wealth in the world]」)を飢餓と渇きと苦境と窮乏のうちに滅びさせることであり、また、誰もが自分を神として受け入れて、永遠に自分の奴僕であればいい、ということなのである。そこで彼の心はずみ、それで彼の血は沸き立つ。同時に、貂の毛皮襟の上着、金の鎖や指輪や衣服を身につけ、口もとをぬぐい、自分を高貴な信心深い人に、すなわち神自身よりもはるかに慈悲深く、聖母やすべての聖徒よりもはるかに親切な人に見せかけて、賞賛されようとするのである。』⁶⁷⁾ [原注 b) の終り] /

- 1) 「1859年」——1894年版でもこうなっているが、現行版では「1851年」に訂正されている。『1861—1863年草稿』でも、「1859年」と誤記されていた。
- 2) エンゲルス版では、この出典は引用のあとに付けられている。
- 3) エンゲルス版では、この注のこれ以下の部分は削除されている。
- 4) ここに太い鉛筆で「(」が書かれている。
- 5) この注の以下の部分は、『1861—1863年草稿』にはない。
- 6) この引用には出典がつけられていないが、前出のルターからの引用と同様に、ルターの『牧師諸氏へ、高利に反対して……』、ヴィッテンベルク、1540年、からのものであり、『1861—1863年草稿』の「損害賠償としての利子」という表題のもとに同書からなされている引用の後半に、ここで引用されている部分が含まれている (MEGA, II/3.4, S. 1536)。なお、そこでマルクスは、ルターからのこの引用のあとに、次のようにコメントしている。——「きわめて生彩に富んだ仕方、同時に一方では古風な高利の性格が、他方では資本一般 [Capital überhaupt] の性格が、次のような言葉で適切に表現されている、——「架空の差損 [Interesse Phantasticum]」、貨幣や商品に「生まれながらに生え込んだ損害 [Schadewacht]」、一般的な有益な文句、「他の人々とは同じ」ではない高利貸の「信心深い」外貌、奪われるのに与えるかのような外觀、引き入れられるのに出て行かせるかのような、外觀、等々！」(S. 1537)。
- 7) ここに太い鉛筆で「)」が書かれている。

/315上¹⁾ 利子生み資本というその属性において、資本には、およそ生産されることのできるいっさいの富が属するのであって、資本がこれまでに受け取ったものは、すべて、ただ、「²⁾あらゆるものを独り占めにする」²⁾,

資本の食欲への³⁾ 分割払いでしかない。資本の生来の諸法則に従って、資本には、およそ人類が供給することのできるいっさいの剰余労働が属するのである。[まさに] モロク [である]⁴⁾。

- 1) 『1861—1863年草稿』には、このパラグラフはない。
- 2) 「「」および「」」——削除。
- 3) 「への」 auf→an
- 4) モロクについては、『1861—1863年草稿』に次の記述がある。——「利子生み資本としての、資本の完全な物象化、転倒、狂妄状態 [Verrücktheit] ——といっても、ここにはただ、資本主義的生産の内的な本性、その狂妄状態が、最も明瞭な形態で現われているにすぎない——は、「複利」を生むものとしての資本であり、そこでは資本は一個のモロクとして現われるのであって、このモロクは、全世界を自分のための当然の犠牲として要求するとはいえ、不可思議な運命によって、彼の本性そのものから生じる彼の正当な諸要求がけって充たされることなくたえず妨害されるのを見るのである。」(MEGA, II/3. 4, S. 1455-1456)

最後になお「ロマン派の」ミュラーの次のたわごとを。——

¹⁾「ドクター・プライスの言う複利の、または人間の自己加速的な諸力の、非常な増大は、この巨大な²⁾ 作用を生み出すためには、何世紀にもわたって分割も中断もされない一様な秩序を前提する。資本が分割されて、それぞれ別々に成長を続けるいくつもの枝に³⁾ 細分されれば、諸力の蓄積の総過程は再び新たに始まることになる。自然は、力の累進を、平均的にほぼ各個の労働者に⁴⁾ 分配される約20年ないし25年の行路に分割した。この期間が過ぎれば、労働者は彼の行路を去るのであって、いまや彼は労働の複利によって得られた資本を新たな1人の労働者の手に渡すか、たいていの場合には何人かの労働者または子供たちのあいだに分配するかしなければならない。これらの人々は、自分たちの手にはいる資本から本来の複利を引き出せるようになる前に、まずこれを生かすこと、または充用することを学ばなければならない。さらに、市民社会が獲得する巨額の資本は、どんなに激しく動く共同体のなかでも、多年にわたってしだいに堆積して行き、労働の直接的拡張のためには充用されないで、むしろ、相当の額が集積し

たときに他の個人や労働者や銀行や国家に借入金という名で引き渡され、次いでその受領者は、この資本を現実に運用することによって、そこから複利を引き出すのであって、その提供者に単利を支払うことをたやすく引き受けることができるのである。最後に、もしもただ生産または節約の法則だけが妥当するのであれば⁵⁾ 人間の諸力やその生産物があのように大きく累進的にふえて行くかもしれないというその累進にたいしては、消費や欲求や浪費の法則が反作用するのである。」⁽⁶⁾/

- 1) 以下のマルクスの引用にはミュラーの原文と異なるところがあるが、それは、『1861—1863年草稿』のMEGA版での「注解」に記載されている(MEGA, II/3.5, S. 1748-1749 und S. 3028)。
- 2) 「巨大な [ungeheuer]」——『1861—1863年草稿』では、「法外な [unermeßlich]」となっている。
- 3) 「それぞれ別々に成長を続けるいくつもの枝に」——原文は in mehrere einzelne, für sich fortwachsende Ableger であるが、エンゲルス版では für が in となっている。ミュラーの原文では für であり、エンゲルスの誤記と思われる。
- 4) 挿入——「(!)」
- 5) 「もしもただ生産または節約の法則だけが妥当するのであれば」——原文は wenn d. Gesetz d. Production od. d. Sparsamkeit allein gelten sollte であるが、エンゲルス版では最後の sollte が sollen となっている。ミュラーの原文では sollte であり、エンゲルスの誤記と思われる。

/315下/〔原注 c〕¹⁾ A・ミュラー『政治学要論』、ベルリン、1809年、第2巻²⁾、147-149ページ。〔原注 c) の終り〕 |

- 1) エンゲルス版では、この出典は引用の末尾につけられている。
- 2) 「第2巻 [Bd. II]」——1894年版でも「第2巻」となっていたが、現行版では「第3部 [III.]」に訂正されている。『1861—1863年草稿』でも、「第2巻 [Bd. II]」と誤記されていた。

/315上/ これよりももっと身の毛がよだつような¹⁾ たわごとをわずかばかりの行数でまとめることは不可能である。労働者と資本家、労働能力²⁾

の価値と資本の利子、等々のこっけいな混同は別としても、複利の減少は、なかんずく、資本が「貸し出され」てそれが「次に複利を」生むということから説明されるというのである。³²⁴⁾

- 1) 『1861—1863年草稿』では、ここに「またわれとわが身を食い尽くすような」という句がある。
- 2) 「労働能力」→「労働力」
- 3) エンゲルス版では、ここで改行されていない。
- 4) 『1861—1863年草稿』では、このあとに次の記述がある。——「この「洞察力」、というよりはむしろこの「たわごと」の並外れた浅薄さは、たとえば「次のとおりである」。「諸物の価格の決定では時間は問題にならない。利子の決定では時間がおもに計算にはいる」(同前, 137-138ページ)。ミュラーがここで述べているのは流通時間のことである。彼は利子では流通時間を規定的なものと見ており、商品の価格ではこれをそのようなものとは見ていないのだから、その洞察力たるや、外観にしがみついて、これの基礎から推論するのはご免、ということにあるのである。この同じ男はわれわれにこう言っている。「都市の生産は、1日1日の巡回〔Turnus〕に縛りつけられているが、これにたいして田舎の生産は1年1年の巡回に縛りつけられている。」(同前, 179ページ。)彼が「都市の生産」といっているのは、農業と対立している工業〔Manufactur〕のことである。資本主義的に経営されていない農業——彼が言っているのはこれのことだ——は、もちろん、1年の巡回に縛りつけられている。これに反して大工業は(固定資本の充用の結果として)12-15年という巡回に、運輸産業のいくつかの部門(鉄道、等々)では20年という巡回に縛りつけられている。」

わがミュラーのやり方は、どの分野でもロマン主義に特徴的なものである。ロマン主義の内容は、事物の最も表面的な外観から汲み取ってきたもろもろのありふれた偏見から¹⁾成っている。次いで、このまちがった陳腐な内容が、それをごまかす表現の仕方によって「高め」られ、詩化されることになるのである。|

- 1) 「事物の最も表面的な外観から汲み取ってきたもろもろのありふれた偏見から〔aus Alltagsvorurtheilen, abgeschöpft v. d. oberflächlichsten Schein d. Dinge〕」——『1861—1863年草稿』では、「きわめて通俗的なもろもろのありふれた偏見から、もろもろの表面の外観から汲み取ってきた陳腐なものから〔aus den vulgärsten Alltagsvorurtheilen, aus dem Schein der Oberfläche

geschöpften Trivialitäten)」となっている。

[316上] 資本の蓄積過程を複利の蓄積と考えることができるのは、利潤(剰余価値)のうちの資本に再転化させられる部分、すなわち新たな剰余労働¹⁾の吸上げに役立つ部分を利子と呼ぶことができるかぎり²⁾でのことである。だが、

1) すべての偶然的な³⁾攪乱を無視しても、再生産過程の進行中に絶えず既存資本の一大部分は多かれ少なかれ減価する。なぜならば、諸商品の価値は、再生産過程においては、⁴⁾それらの生産に最初に費やされる労働時間によってではなく、それらの再生産に費やされる労働時間によって規定されており、しかも、この労働時間は労働の社会的生産力⁵⁾の発展の結果、たえず減少して行くからである。それゆえ、社会的生産力のより高い発展段階では、すべての既存資本は、「貯蓄された資本」⁶⁾(なんと**う**い**う**ば**か**げ**た**表**現**だ!)⁷⁾の長い過程の結果としてではなく、相対的に非常に短い再生産期間の結果として現われるのである。(a)/

1) 「剰余労働」Surplusarbeit→Mehrarbeit

2) 「かぎり」so weit...als...→insofern...als...

3) 「偶然的な」accidentell→zufällig

4) 「再生産過程においては、」——削除。

5) 「生産力」→「生産性」

6) 「貯蓄された資本 [Capital saved]」→「資本節約 [Kapitalaufsparung]」

なお、「貯蓄された資本」という表現は、前出の『エコノミスト』からの引用のなかにあったものである。

7) 「(なんと**う**い**う**ば**か**げ**た**表**現**だ!)」——削除。

/316下/ [原注] a)¹⁾ ミルとケアリ、また彼らの所説へのロッチャーの
人を誤らす注釈を見よ。[原注 a) の終り] /

1) エンゲルス版では、この注は脚注とされている。

/316上/ 2) 第3部第3章が論証した¹⁾ように、利潤率は、資本の蓄積²⁾とこれに対応する社会的労働の生産力とに比例して低下し、この生産

力は、まさに不変資本³⁾に比べての可変資本⁴⁾の相対的減少の進展に表わされる。もし1人の労働者が10倍の量の資本を運動させるとすれば⁵⁾、同じ利潤率をあげるためには、剰余価値⁶⁾も10倍にならなければならないであろう。そして、やがては、全労働時間が、じつに1日24時間が全部資本によって取得されても、まだそれには足りなくなるであろう。しかし、この観念⁷⁾がプライスのな累増の根底にはあるのであり、またおよそ「複利であらゆるものを独り占めする資本」の根底にはそれがあるのである。^{b)}

- 1) 「第3部第3章が論証した」→「この部の第3篇で論証された」
- 2) 挿入——「の上昇」
- 3) 挿入——「部分」
- 4) 挿入——「部分」
- 5) 「もし1人の労働者が10倍の量の資本を運動させるとすれば [wenn ein Arbeiter 10× dieselbe Masse Capital in Bewegung setzt als wenn einmal]」→「もし1人の労働者によって運動させられる不変資本が10倍になれば」
- 6) 「剰余価値」→「剰余労働時間」
- 7) 「この観念」→「利潤率は減少しないという観念」

/316下/〔原注 b〕¹⁾「²⁾どんな労働も、どんな生産力も、どんな明智も、どんな技術も、複利の圧倒的な要求に応じることはできない、ということ は明らかである。しかし、すべての貯蓄は資本家の収入からなされるのであり、したがって現実にたえずこの要求がなされるのであるが、それと同様にたえず労働の生産力はこの要求をみたすことを拒むのである。それゆえ、たえず一種の差引勘定が行なわれるのである³⁾。」(『資本の要求にたいする労働の防衛』、23ページ。⁴⁾〔 〕〔原注 b)の終り〕

- 1) エンゲルス版では、この注は脚注とされている。
- 2) 『1861—1863年草稿』のノート第15冊のホジスキンの関する項目のなかに、以下の引用を含む引用があり、その直前に「複利。」と書かれている。そこでは、ここでの引用の前に次の部分が引用されている。——「だれでもちょっと見ただけで納得するにちがいないのは、単純な利潤は社会の進歩につれて減少するのではなく増加するのだということ、すなわち、以前のある時代に100ク

ォーターの小麦とか100台の蒸気機関とかを生産したのと同じ労働量が、今日ではいくらかより多くを生産するであろうということである。……また、じっさい、以前よりもはるかに多数の人々が今日この国で利潤によって豊かに生活しているのが見られるのである。しかしながら、」(MEGA, II/3.4, S. 1434)

3) 『1861—1863年草稿』のこの箇所に、MEGAの編集者は次の「注解」をつけている。——「ホジスキンは彼の著書で、「一種の差引勘定が……なされている」ということで彼がなにを言おうとしているかを、続けて次のように説明している。「資本家が労働者に生計手段をもつことを許すのは、資本家は労働なしではやって行けないからであって、他方、資本家は、まったく寛大にも、この目的のために必要でないものは生産物中のどんな小さな断片でも取り上げてしまうことで満足するのである。」(MEGA, II/3.4, S. 3004)

4) 挿入——「——ホジスキン著」

/316上/ 剰余価値¹⁾と剰余労働²⁾との同一性によって、資本の蓄積には1つの質的な限界がおかれている。——³⁾総労働日⁴⁾がそれであり、生産諸力と人口とのそのときどきに⁵⁾見られる発展がそれであって、この人口は同時に搾取できる労働日の数の限界となる⁶⁾のである。これに反して、剰余価値が利子という無概念的な形態でとらえられるならば、限界はただ量的なものであって、どんな想像力でも⁷⁾あざ笑うようなものになるのである。⁸⁾

1) 「剰余価値」Surplus value→Mehrwert

2) 「剰余労働」Surplusarbeit→Mehrarbeit

3) 「——」→「すなわち〔:〕」

4) 「総労働日」——エンゲルス版でも強調されている。

5) 「そのときどきに」——草稿では、jedesmalichとなっているが、jedesmaligの誤記であろう。エンゲルス版では jedesmal となっている。

6) 「限界となる」limitiren→begrenzen

7) 「どんな想像力でも〔all the powers of imagination〕」→「どんな想像をも〔jede Phantasie〕」なお、「どんな想像力でもあざ笑う」という表現は、前出のプライスからの最初の引用のなかにあるものである。

8) 『1861—1863年草稿』には次の記述がある。——「剰余価値と剰余労働との同一性によって、資本の蓄積には1つの質的な限界がおかれている。——総労働日(24時間のうちで労働能力が活動していることのできる時間)がそれであ

り、生産諸力と人口とのそのときどきに見られる発展の段階がそれであって、この人口は同時に搾取できる労働日の数の限界となるのである。これに反して、剰余利得が利子という無概念的な形態でとらえられるならば——すなわち、資本が不思議な手品によって増えていく割合としてとらえられるならば、——限界はただ量的なものにすぎないのであって、資本はなぜ、いつでも翌朝に利子を、資本としてふたたび自分につけ加え、こうして無限級数的に利子から利子をつくりだす、ということをしなないのかは、絶対にはわからないのである。」(MEGA, II/3.4, S. 1538-1539)

しかし、利子生み資本では資本物神の観念が完成されているのであって、この資本物神は、自動機関として或る生来の質によって対象的な富に、そのうえ貨幣として固定されたそれに、幾何級数的に剰余価値を生み出す力を付与するのであり¹⁾、それゆえにまたこの資本物神は²⁾、『エコノミスト』が言っているように、あらゆる時代の世界のいっさいの富を正当に自分に帰属し与えられるものとしてすでに長いあいだ³⁾割引してきたのである。⁴⁾過去の労働⁵⁾が、ここではそれ自体として現在または未来の生きている剰余労働⁶⁾の一片をはらんでいるのである。ところが、だれでも知っているように、じつは過去の労働の生産物の価値の維持は、そしてそのかぎりではこの価値の再生産は⁷⁾、ただ、それらの生産物と生きている労働との接触の結果でしかない⁸⁾のであり、また第2に、過去の労働の生産物が剰余労働⁹⁾に命令するということが続くのは、まさにただ、資本関係、すなわち、過去の労働が生きている労働に¹⁰⁾対立しているという一定の社会的関係が存続するあいだだけなのである。|

1) 「この資本物神は、自動機関として或る生来の質によって対象的な富に、そのうえ貨幣として固定されたそれに、幾何級数的に剰余価値を生み出す力を付与するのであり [der als Automat, durch some innate quality dem gegenständlichen Reichthum, dazu fixirt als Geld, d. Kraft zuschreibt in geometrischer Progression Mehrwerth zu erzeugen.]」→「この観念によれば、積み上げられた、しかもそのうえに貨幣として固定された労働生産物には、生まれつきの秘密な質によって純粋な自動機関として幾何級数的に剰余価値を生み出す力がそなわっているのであり」

- 2) 「それゆえにまたこの資本物神は [u. der daher.]」→「したがってこの積み上げられた労働生産物は」
- 3) 「すでに長いあいだ [bereits lange.]」→「すでに久しい以前から [schon längst.]」
- 4) 挿入——「過去の労働の生産物が、」
- 5) 挿入——「そのもの」
- 6) 「剰余労働」 Surplusarbeit→Mehrarbeit
- 7) 「は」→「もまた」
- 8) 「ただ……でしかない」——エンゲルス版でも強調されている。
- 9) 「剰余労働」 Surplusarbeit→Mehrarbeit
- 10) 挿入——「自立のかつ優勢に」

(1988年5月9日)